福井県立美術館 2017

美術館だより

MUSEUM NEWS Vol.152

contents

〈イベント報告〉「ランス美術館展 ―ダヴィッドからピサロ、ゴーギャン、藤田嗣治まで」 [2～3]
〈イベント報告〉「物語を紡ぐ―描かれた物語の世界―」・新春展「酉の美術」 [4]
〈テーマ展紹介〉「豪華絢爛　屏風の美」 [5]
〈連載〉福井画人列伝　芳崖門下の学者画家・岡不崩【其の参】 [6～7]
ブブ広報部隊の１年を振り返る　平成２８年度版 [8]
それゆけ！ブブ広報部隊　其の八
平成２９年度実技講座受講生・友の会会員の募集
お知らせ・貸館情報

表紙：狩野安信「竹虎図屏風」（右隻・部分）江戸時代（17世紀）、六曲一双、奈良県・浄福寺

《イベント報告》

ランス美術館展 2016年 11/5[土]－12/25[日]

～ダヴィッドからピサロ、ゴーギャン、藤田嗣治まで～

◉見どころ解説会

[日　時] 会期中の土・日・祝日（11/5を除く）午前10時30分～
[会　場] 美術館講堂
[講　師] 芹川貞夫（当館美術専門員）
　　野田訓生（当館総括学芸員）

ランス市の紹介から、作家や作品のかくされたエピソードまで、映像資料を用いながら展覧会の見どころをわかりやすく解説しました。観覧前のお客様はもちろん、観覧途中で参加されるお客様もあり、熱心に聴講をいただき好評でした。会期終盤には午後にも開催されました。

◉ブロガーナイト

[日　時] 平成28年11月6日(日) 午後5時～7時
[会　場] 展覧会会場
[講　師] 芹川貞夫（当館美術専門員）
　　野田訓生（当館総括学芸員）

本展の魅力を、FacebookやTwitter等のインターネット上で発信していただこうと、ブロガーを対象とした特別鑑賞会が開かれました。当館の美術専門員・学芸員の解説を聞きながら、当館マスコットキャラ・ブブ広報部隊とともに展覧会をめぐりました。当館では初となる試みでしたが、県内の有力ブロガーの方々に参加をいただき、会場で撮影された画像とともに多様な切り口の情報が発信されました。

◉レオニャール・ネコ展

[日　時] 平成28年11月9日(土)～12月4日(日)
[会　場] 美術館エントランスロビー

今回展示されている藤田嗣治の代表作「猫」にちなんで、「わが家の自慢の猫」の写真を募集し、無料スペースに展示しました。おりからの猫ブームの中、美術はちょっと苦手という皆さんにも美術館へ足を運んでいただける、楽しいミニ展示となりました。

◉記念講演会「西洋美術鑑賞のポイント」

[日　時] 平成28年11月20日(日) 午後2時～
[会　場] 美術館講堂
[講　師] 芹川貞夫（当館美術専門員）

フランス絵画の変遷や藤田嗣治の芸術について、元当館館長でフランス留学経験もある芹川専門員が講義を行いました。ルネサンスから近代にいたる美術史の流れが、わかりやすい図解を用いて、丁寧に説明されました。ときにジョークも交えつつ、各時代の美術様式と実作との関係を紐解き、聴衆をより本質的な理解へと導こうとする、濃密な時間となりました。

Musée des Beaux-arts de Re

華麗なるフランス絵画

シャンパンと大聖堂で名高いフランスの古都、ランス。ランス美術館は、美酒シャンパンの富がもたらした、その優れたコレクションで世界的に知られています。本展では、この「フランス絵画の宝庫」から選りすぐられた約70点の絵画作品を、ヨーロッパの美術館を思わせる美しい展示空間の中で展観いたしました。17世紀の宮廷画家から始まり、優雅なロココ様式、ダヴィッドに見る新古典主義からドラクロアのロマン派、19世紀の近代風景画、印象派からポスト印象派へと、「珠玉のフランス美術」を堪能いただきました。とりわけ、ランスで洗礼を受けレオナール・フジタとなった、藤田嗣治の作品群は多くの来場者を魅了しました。当館と福井新聞社、福井放送との実行委員会により実施された本展では、多彩な関連イベントも盛りだくさんに開催され、クリスマスシーズンの中、多くの方々に楽しんでいただきました。

◉ソムリエトーク会「シャンパンと芸術の味わい方」

[日　時] 平成28年11月23日(水・祝) 午後1時30分～
[会　場] 美術館講堂
[講　師] 中村哲也氏（JSA北陸支部役員、JSA認定シニアソムリエ）
黒原真理氏（フリーアナウンサー）
芹川貞夫（当館美術専門員）

トーク会では、ランス美術館とシャンパンで財をなした富豪たちのかかわりや、藤田嗣治とシャンパンの深い縁、シャンパンのおいしい味わい方などについて、おしゃれに会話が展開しました。会場にはシャンパンのボトルも展示され、美酒と美術が交錯するお話に、聴衆は少し贅沢な時間を過ごしているようでした。

◉トークサロン「らんらんランス展ウラ話」

[日　時] 平成28年12月4日(日) 午後5時～
[会　場] 美術館喫茶室ニホ
[講　師] 野田訓生（当館総括学芸員）

くつろいだ雰囲気のなか、担当学芸員が展覧会のウラ話や苦労話を披露しました。ボツになったポスターデザインから、会場で使われている壁布の素材まで、普段は触れることのない資料は、参加者の興味をひと際かきたてたようでした。

◉クリスマスコンサート

[日　時] 平成28年12月11日(日) 午後1時30分～
[会　場] 美術館エントランスロビー
[演　奏] Primo Amore（プリモ・アモーレ）

クリスマスを目前に、ギター、フルート、ヴィオリラで構成する県内の演奏家グループによる楽しい音楽が、会場に響き多くの来場者を楽しませました。

主な曲目：「White Christmas」「Happy Xmas」
「We Wish You A Merry Christmas」
「ママがサンタにキスをした」

◉ソプラノ・クリスマスコンサート

[日　時] 平成28年12月23日(金・祝) 午後5時～
[会　場] 美術館エントランスロビー
[出　演] 東　　園氏（ソプラノ歌手）
滝口天音氏（ピアノ奏者）

クリスマスコンサート第二弾は、午後7時までの開館延長にあわせ、優雅なクラシック音楽の美声が夜の美術館に響きました。会場の西洋絵画やキリスト教作品とも、絶妙のハーモニーを奏で、来場者はひと味違う鑑賞の時間を過ごしているようでした。

主な曲目：「私の名はミミ」（オペラ ラ・ボエームから）
「アヴェマリア」「きよしこの夜」
「ジムノペディ」（エリック・サティ）ピアノソロ

◉連携イベント

県内の飲食店を中心に70店舗以上との連携企画が行われました。チケット（半券）提示による飲食代の割引やドリンクサービス、特別メニューの提供など様々なサービスが提供されました。また、公共交通機関との連携では、利用者の割引がありました。県立図書館や市立図書館では、特設コーナーが設置されました。街ぐるみで、展覧会と生活との楽しいコラボレーションが生まれました。

《イベント報告》

テーマ展「物語を紡ぐ ―描かれた物語の世界―」

平成29年 1月3日(火)～2月12日(日)

新春展「酉の美術」

平成29年 1月3日(火)～1月22日(日)

館蔵品から物語を題材に描いた作品を紹介した本展では、日本神話、伊勢物語や源氏物語に代表される王朝文学、釈迦・聖徳太子の一代記などの仏教説話、軍記物語として広く知られる平家物語など、日本絵画に表されてきた物語のイメージを紹介しました。特に煌びやかな金地に鮮やかな色彩で描かれた江戸時代の源氏物語図屏風には、多くの方が足を止めて見入っていました。

また1月3日(火)から22日(日)まで開催された新春展「酉の美術」では、鶏をはじめ、鷹や鶴など新年を寿ぐおめでたい屏風や掛け軸を展示しました。

これにあわせて会期中、新春にちなんだイベント、あるいは講演会を多数開催し、多くの方に来場していただきました。

【関連イベント】

◆お琴演奏会

［日　時］1月7日(土) 午後2時～
［場　所］福井県立美術館　エントランスホール
［演奏者］啓新高等学校日本音楽部
［曲　目］箏二重奏　春の海、箏と十七絃のための歳時記 ふるさと、三絃独奏のための「三体月」、赤い花束 以上5曲

琴を演奏する部員のみなさん

葵亭真月氏

◆新春落語会

［日　時］1月15日(日) 午後2時～
［場　所］福井県立美術館　講堂
［演目・出演者］
「権 助 魚」葵亭真月氏
「火炎太鼓」中秋亭迷月氏
「田楽喰い」みどりのQ月氏

◆講演会

［日　時］1月22日(日) 午後2時～
［場　所］福井県立美術館　2階常設展示室
［講　師］北村明恵氏（福井市立図書館 司書）
［演　題］「絵からよむ『源氏物語』」

北村明恵氏

内田景水氏

◆琵琶楽の調べ

［日　時］2月11日(土・祝) 午後2時～
［場　所］福井県立美術館　講堂
［出演者］内田景水氏（錦心流琵琶 全国一水会福井県支部長）
［曲　目］「重衡」、「扇の的」

豪華絢爛 屏風の美

平成29年 2月17日(金)～3月20日(月・祝) ※2月27日(月)は休館します。

【開館時間】 9：00 ～ 17：00（入館は16：30まで）
【場　　所】 福井県立美術館 2階展示室（常設展示室、第3展示室）
【観 覧 料】 一般・大学生100円 ＊20名以上の団体は2割引。
＊高校生以下、70歳以上、障害者手帳等をお持ちの方とその介助者1名は無料。
＊第3日曜日「家庭の日」は無料。

日本絵画の伝統的な形式である屏風。今では美術館でガラス越しに美術品として鑑賞する事が多い屏風ですが、もとは日常的に使用された道具です。屏風は蝶番（ちょうつがい）で自由に開閉することができ、折り畳んだ状態であれば、一人でも持ち運びが可能な移動式の壁です。室内の間仕切り、風よけ、目隠しなどの機能を備え、あるいは室内空間を演出する装飾品として儀礼の場などで用いられました。

本展に出品する「落葉」に見るような一枚続きの大画面形式は、室町時代の後期に成立し、以降六曲一双を基準に、二曲、四曲、八曲など、時代を下るとともにその形式は多様に展開しました。その用途も儀礼用や間仕切り用から観賞用へと変化し、当初は主に貴族ら上流階級によって用いられた屏風ですが、江戸時代には庶民階級にも普及しました。明治以降は、画家が展覧会で発表する大画面形式としての役割に特化し、次第に屏風本来の機能は失われていきます。

本展覧会では「屏風」という画面形式を取り上げ、屏風ならではの大画面の表現に注目します。そして屏風に展開するダイナミックな画面構成、金箔や金砂子など屏風に施された装飾など、煌びやかで豪華絢爛な屏風の魅力を紹介します。

下村観山「寿星」　大正4（1915）年頃、絹本著色、六曲一双、（各）168×370.2㎝

菱田春草「落葉」　明治42（1909）年、紙本著色、六曲一双、（各）154×354.3㎝

【関連イベント】 申込不要

◆講座「屏風のいろは」

[日　時] 2月25日(土) 14:00～15:00
[場　所] 当館講堂・常設展示室
[講　師] 戸田浩之 主任（学芸員）
[内　容] 屏風鑑賞に必要な基礎知識や歴史、あるいはテーマ展の見どころについてお話します。

◆ワークショップ「ミニ屏風をつくろう！」

[日　時] 3月11日(土) 14:00～16:00
※定員に達した場合は終了。
[場　所] 当館エントランスホール
[講　師] 内藤秀信氏（ペーパークラフトモデラー、ごじら工房主宰）
[定　員] 25名

福井画人列伝

芳崖門下の学者画家・岡不崩【其の参】～芳崖入門についての覚書～

学芸員　椎野晃史

今回は芳崖の下に集った若い画家、特に「芳崖四天王」と称された4人の画家について紹介する。芳崖にはのちに日本美術院の中心作家となる下村観山や、門下唯一の閨秀画家・前田錦楓、福井生まれの山本松渓の他、「芳崖四天王」と称された四人の高弟が居る[註1]。岡倉秋水（1869−1950）、高屋肖哲（1866−1945）、本多天城（1867−1946）、そして本連載の主人公・岡不崩である。私の関心は同門の中でなぜ彼らが「芳崖四天王」に選ばれたのか、そして本来ならば四天王候補の大本命であるはずの観山がなぜ含まれていないのか、という2点にある。これらを念頭に置きながら、まずは彼らが入門した時期をそれぞれ確認しておこう。

芳崖四天王とその入門時期について

不崩曰く「芳崖先生の門人中では、予が一番故参」[註2]であったという。また別の資料でも「鑑画会の相談があった、其時初めて芳崖先生に接したので、それから後ち時々先生の宅へ伺つて、いろいろ教を受けました。その時は外に門人はお取になつてゐませんで、（後略）それから後に本多（※天城）氏が、やはり友信先生の紹介で入門されました」[註3]と繰り返されている。前回の連載で紹介した不崩の証言において、芳崖が出会ったのは明治17年と回想していることから、おそらく芳崖の教えを受けるようになったのも明治17年～18年頃と推定される。

次に岡倉覚三（天心）の甥にあたる秋水についてみていこう。秋水は、不崩や松渓と同じ福井生まれであり、芳崖に入門した時期も不崩と同じ明治17年あるいは18年と推定される。秋水の孫である岡倉日出夫氏は秋水の入門時期について、学習院に残る履歴書の記述―明治13年―と秋水が芳崖の「仁王捉鬼図」について書いた文章の記述―明治18年―を引用し、5年ほどの誤差について疑問を呈している[註4]。また『狩野芳崖　悲母観音への軌跡』の図録に掲載された年表では、岡倉秋水著「狩野芳崖翁の生涯と其作品」の記述から入門の年を明治17年としている[註5]。これらの記述を鑑みれば、やはり不崩と似たような時期に入門したと考えたい。

天城はあまり資料が残されていないが、昭和9年発行の『本多畫伯小傳』（以下、『小伝』と略す）では入門を明治15年と記している[註6]。しかしながら東京藝術大学所蔵の履歴書では、明治18年3月の入門となっており、秋水同様、資料によって入門時期が異なるが、『小伝』において「翁時に本郷西片坊に住するを聞き」、入門を願うために面会を求めたと記している。このことから、『小伝』の明治15年入門説は芳崖が本郷西片町に転居した明治16年、あるいは17年以降の間違いと考えられる。よって、ここでは履歴書の明治18年5月入門と考えたい。

最後に肖哲だが、後年の回想で「私は十九年五月に芳崖師に弟子入りをしたのですが、先きに橋本雅邦先生の弟子に岡倉秋水、狩野友信先生の弟子に岡不崩本多天城の三君が芳崖師に就て画説を聞いておりました」[註7]とあり、明治19年5月、四天王の中では最後に入門したと考えられる。

以上、それぞれの資料から入門時期について確認してきたが、いずれも本人の回想に拠る部分が多く、確証は乏しい。しかしながら、明治18年9月12日から14日にかけて両国中村楼で開催された第1回鑑画会大会に不崩（梅渓の名で出品。ただし梅渓については不崩と同一人物である確証はない。）と秋水が出品していること、しかも秋水はこの時出品した「鷲」（所在不明）が4等賞を与えられていることから、この時期にはある程度の修練を積んでいたことが想定される。

芳崖門下における観山の位置

一度整理するならば、不崩が初めに入門し、その後秋水、天城、肖哲と続いたと現段階では仮定できようか。しかしながらここに疑問が生じる。観山の存在である。観山ははじめ藤島常興に就いたのち、藤島の勧めにより明治15年頃芳崖へと入門し、その後明治19年に雅邦へ入門したというのが定説である。つまり観山は明治17年頃に芳崖へ入門した不崩より早く芳崖に就いて教えを受けており、「予が一番の故参」とする不崩の回想と矛盾する。しかしながら、改めて観山の芳崖入門について再考するならば、東京美術学校の履歴書の記載に注意を払いたい。履歴書では「明治十五年ヨリ藤島常興ニ従ヒ二年間南宗画修行」とあり、「明治十七年三月ヨリ橋本雅邦ニ従ヒ四年間北宗画修行」と続く。観山の三男である下村英時氏はこの履歴書について「芳崖に就いた事実の記載無し。如何なる理由に因るものか。十七年は十九年の誤りならん」[註8]と指摘しているが、確かに明治41年3月に刊行された『日本美術』に掲載される観山の雅邦談では、「僕（観山）は明治十九年に十四歳で先生（※雅邦）の門に入った。（中略）僕より以前に

［註1］狩野友信の回想では、尾形月耕の弟・滝村弘方も初め狩野探美に就いていたが、後に芳崖の門に入ったと伝えている（狩野友信「芳崖逸話」『日本美術』第81号、1905年）。
［註2］岡不崩『しのぶ草』（日英舎、1910年12月）
［註3］不崩後援会編『岡不崩畫伯略傳』（刊行年不詳）
［註4］岡倉日出夫「岡倉秋水伝」『五浦論叢』第16号（2009年9月）
［註5］東京藝術大学大学美術館、下関市立美術館編『狩野芳崖　悲母観音への軌跡』（芸大美術館ミュージアムショップ／㈲六文舎、2008年）
［註6］『本多畫伯小傳』（1934年）
［註7］高屋肖哲「座談会の後に」『東京美術学校校友会月報』（1931年4月）
［註8］下村英時『下村観山伝』（大日本絵画、1981年8月）
［註9］下村観山「雅邦翁談」『日本美術』第109号（1908年3月）

入門して居ったのが岡倉秋水、本多天城の二君で、(後略)」[註9]とある。また明治19年6月27日に浅草須賀町井生村楼で開催された鑑画会例会の記事では、「特に下村清三郎氏ハ年齢十三歳、橋本氏の門弟なるが其揮毫の雪景の山水は、恰も老練家の筆に成りたるが如く、実に後世恐るべしとて見る人舌を振るへり」[註10]とあることから、少なくとも明治19年6月には雅邦に学んでいたことがわかる。ちなみに後年の観山による芳崖談において、下村家と芳崖の関係について詳しく語られているが、観山が芳崖に入門した事について一切触れていないことも興味深い[註11]。

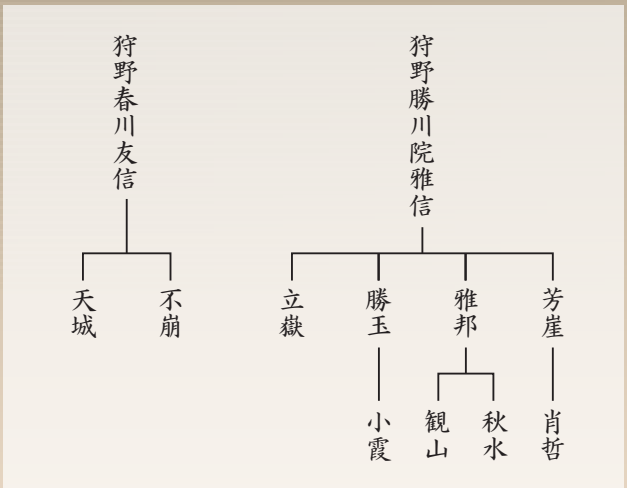
この関係から肖哲の談話も紹介しておきたい。昭和10年に肖哲が著わした『狩野芳崖伝』において、「東都の上りて日本画家たらんとするに際し、尤も格好の師匠として、芳崖先生に師事することになり、先生歿去の日まで待側し居りしも、他に真の弟子とてはなく真の弟子として、先生の薫陶を受けたものは予(肖哲)ひとりであった」[註12]として、明治21年時の狩野派系図を掲載している【図1】。それによれば、芳崖の系譜には自身一人を置き、雅邦の下に秋水と観山、友信の下に不崩と天城を配置している。補足として肖哲の回想を以下引用する[註13]。

> 私は十九年五月に芳崖師に弟子入りをしたのですが、先きに橋本雅邦先生の弟子に岡倉秋水、狩野友信先生の弟子に岡不崩本多天城の三君が、芳崖師に就て画説を聞いておりました。(中略)少し話がおくれましたが私は直接芳崖師の弟子となりしことの珍らしいのですか判らぬが、芳崖師は日本第一の画家と聞きましたが其通り矢張り文部省では大した話の様に聞きました。私の習画の手ほどきを狩野友信先生に委せられて(中略)、其内畫手本も進み次第に芳崖師に近づき高説を受くる様になりました。

要するに肖哲は初めから芳崖に直接弟子入りをしたのは自分一人であると主張したいのであるが[註14]、斯くいう肖哲自身も基礎は友信に習い、習画の段階が次第に進むにつれ、芳崖の高説を受けるようになったという。この回想は、それぞれが別の師に就きながら、同時に芳崖からも教えを受けていたことを伝えている。

その実態を伝える図画取調所に関する不崩の回想を以下引用する[註15]。

> 芳崖・友信翁二翁が毎日出勤して画をかいている。我々も毎日弁当を持て出かける。然し余等ハ掛員でもなんでも無い。それならば何んで行くのかそこが面白のだ。我々の頭脳にハ茲は役所であると云ふ考えが浮かばない。芳崖先生の画塾か鑑画会の事務所としか思へなかった。取調所の小使や植物園の人達は、余等を取調所の生徒だと思っていた。毎日出かけて行って鑑画会へ出品する画をかいている。古画の模写をやる、芳崖先生の画論を聞く、友信先生の彩色法を習ふ、庭園の写生をやる、下画が出来ると芳崖先生の批評を受ける、勝玉や貫義がやってくる、探美や立嶽なども遊ひにくる、雅邦もくる。どをしても画塾である。



【図1】明治21年時狩野派系図(高屋肖哲『狩野芳崖伝』)

当時の図画取調所の実態は狩野派の画塾のようなもので、狩野派の画家が集い、若い不崩らに画談を聞かせ、時には絵を批評するなど、自由な気風が感じられる。そのようにして修練を積んだ彼らは、開校間もない東京美術学校において、同級生から「芳崖四天王」と称され一目置かれることになる。つまり「芳崖四天王」という冠は一種のステータスであり、同時に美術学校開校直前に亡くなった芳崖の衣鉢を継ぐという意識を強く発信していたのである。

さて観山について話を戻すならば、観山は自身を芳崖門下と謳っていないし、芳崖四天王からも芳崖門下と認識されていないようである[註16]。もちろん芳崖の傍で接していた観山も、もれなく芳崖から薫陶を受けていたと考えられるが、観山の場合、4人と比べて芳崖との間に距離があったのかもしれない。例えば観山は、明治20年に不崩、秋水、天城を伴った芳崖の妙義山の写生旅行には同行していない[註17]。芳崖四天王を考えるなかで観山の存在は重要であると考えるが、紙面が尽きるため、冒頭の疑問は今後の課題とする。次回は不崩を中心に、弟子たちが見た師・芳崖について、当時のエピソードを交えながら紹介する。(つづく)

[註10] 「雑報」『第日本美術新報』第32号(1886年6月)
[註11] 『近世名人達人大文豪』(大日本雄弁会講談社、1928年)において観山は芳崖のことは「芳崖」あるいは「翁」と記しているが、雅邦については「雅邦先生」と敬称を付けて記している。また観山は彼の少年時代の回想として、芳崖が観山の祖父や父と懇意の仲であり、よく愛宕下の下村家に遊びに来ていたことを紹介している。
[註12] 高屋肖哲『狩野芳崖伝』(高屋徳次郎、1935年)
[註13] 前掲註7。
[註14] ちなみに肖哲は天城を友信門と認識しているが、観山の回想では天城は雅邦門下と伝えている。
[註15] 岡不崩談「鑑画会の活動」(個人蔵資料『日本美術院百年史 一巻下』より)
[註16] 肖哲が明治35年に編纂した『芳崖遺墨(前篇)』では、門人として四天王と錦風、松渓を含む6名の名前を挙げているが、観山は含まれていない。
[註17] 肖哲は同年11月に岡倉、天城、相馬邦之助と共に妙義山に訪れている。

平成28年度版

ブブ広報部隊の一年を振り返る

当館のFacebook上で広報活動を担うブブ広報部長は、2013年11月11日、「空前絶後の岡倉天心展」開催中に突如として現われた。最初は学芸員に心の余裕があるときのみ登場する限定キャラであったが、同月21日に助手のミニブブ広報部員、2014年4月24日にポール広報部員が電撃加入したことにより、全員男子で構成されるブブ広報部隊が結成された。

お洒落感やスタイリッシュさを削ぎ落としたヤニくたいFacebookであるため、ターゲットは狙わずしてお洒落感を求める若者はスルーし、ブブ広報部隊の年齢層と重なる30代半ば以上となっている。

平成28年度は「岩佐又兵衛展」「ランス美術館展」のイメージに合わせて衣替えを行った。なお、イラストは事務所のM氏がワードを駆使して作成している。

岩佐又兵衛展仕様

ランス美術館展仕様

ブブ広報部長

部隊の代表でインテリなブタを目指している。読書家ゆえに「それゆけ!ブブ広報部隊」はしばしば部長の読書日記と化す。当館開館と同年ゆえ現在39歳である。

ポール広報部員

助手でカエル。たまにオヤジ的コメントが入るのは、学芸Nのつぶやきを拾うためであるが、ポール自身アラフィフの中年である。

ミニブブ広報部員

助手でブタ。箱入り息子で部隊中唯一の個室持ち。夜は専用ベッドで質のよい睡眠をとっている。連れて歩くのにちょうど良いサイズ感であるため、学芸Sの出張に同行することが多い。好奇心旺盛な未就学児。

絵・文　ささきみほ

お知らせ

平成29年度

実技講座受講生の募集

福井県立美術館では「日本画」「洋画」「素描（デッサン）・水彩画」の基礎講座（4～5月・10回）、専門講座（6月～10月・25回）の受講生を募集します。

～詳細は当館に備えてある募集要項やホームページをご覧ください～

◎定員
- 日本画（基礎講座・専門講座）／定員15名
- 洋　画（基礎講座・専門講座）／定員15名
- 素　描（デッサン）
  ・水彩画（基礎講座・専門講座）／30名

◎募集期間
- 基礎講座　3月1日㈬～ 20日㈪まで
- 専門講座　5月1日㈪～ 15日㈪まで

平成29年度

会員募集のお知らせ

詳しくは、事務局（TEL.0776-25-0452）までお問い合わせください。

福井県立美術館 友の会

年会費	一般会員 2,000円／家族会員 4,000円／特別会員 10,000円
特典	①展覧会　●企画展無料入場券配布（一般会員1枚、家族会員3枚、特別会員8枚） ②友の会ニュース（随時）、美術館だより（年4回ほど）送付 ③ミュージアムグッズ2割引（常設展のみ） ④実技講座、美術館見学会（年2回）への参加［実費負担］
申し込み	平成29年4月1日㈯以降

◎2月～3月の休館日について

展示替え、館内メンテナンス等のため、次の日は休館とさせていただきますのでご了承ください。
2月27日㈪、3月21日㈫、22日㈬、27日㈪～31日㈮

貸館情報 [2/17~3/30]

- 2/17～2/19 ● 第7回聴雪社書展
- 2/17～2/19 ● 福井高校デザイン分野第50回卒業制作 第10回OB展・在校生作品展
- 2/17～2/19 ● 福井大学書道専攻生・書道部修了 卒業・卒部・制作展
- 2/22～2/26 ● 福井県庁退職者連盟会員第7回作品展
- 2/23～2/26 ● 「垣内蘭畦書展」
- 2/24～2/26 ● 福井デザイン専門学校 創作展
- 3/2～3/5 ● 爽和会日本画展
- 3/3～3/5 ● 福井三大学写真部合同卒展
- 3/8～3/12 ● 福井大学教育地域科学部美術教育サブコース卒業・修了制作展
- 3/15～3/19 ● 堀川和代絵画展―ノスタルジアの世界
- 3/15～3/19 ● 第13回福井新協展
- 3/17～3/20 ● 「ふくいの自然2人展」
- 3/23～3/26 ● 第23回玲風会日本画展
- 3/23～3/26 ● 第3回絵画グループA作品展（油彩画）
- 3/23～3/26 ● 玲風会三人展
- 3/24～3/26 ● 第13回藤島高校書道部展

本誌は再生紙を使用しています。

編集／発行：福井県立美術館　〒910-0017 福井市文京3丁目16-1　tel.0776-25-0452　印刷：河和田屋印刷株式会社　発行日：平成29年2月24日　17.02.20220